

# テンノウヘイカバンザイ

石川逸子

テンノウヘイカバンザイ！

二度と聞きたくなかった 言葉

1990年11月12日

その言葉を聞いて あっけにとられた

あろうことか 天皇の即位式の時

海部首相がはるか高御座に坐る天皇を仰ぎ見

テンノウヘイカバンザイ！ と三唱したのだ

やがて2019年10月22日にも 現天皇を仰ぎ見

安倍首相の バンザイ三唱

そのテンノウの名によって

徴兵された 将兵たちが

「テンノウヘイカの おんために」

朝鮮に 中国に 東南アジアに攻め入って

殺戮・強かん・略奪・放火

ありとあらゆる暴虐をはたらいた事実を

忘れたとでもいうのだろうか

いわれなく殺されたアジアの死者たちが

バンザイ三唱を聞いて

地の底から憤怒の声をあげるのが

聞こえないとでもいうのだろうか

台湾からフィリピンの「慰安所」に連れていかれ

日々 殺すといわれて強かんされ

日本軍とともに山へ逃れ

たった一人生き延びた女性は

日本軍に撃たれて死んだ友の遺品に

今も 毎日供え物し 祈りながら

その償いを テンノウにこそしてほしいと

つい先ごろ 日本へ来て訴えている

皇国教育にまるごと染められ

テンノウヘイカバンザイ！ 叫びながら

原爆に体ごと焼けて本川をながれていた

私と同年の広島二中一年生もいた

テンノウヘイカバンザイ！

その言葉をさらに

2013年 4月28日 ニュースで聞いた

サンフランシスコ講和条約締結日を祝う式典で

退席しようとする天皇夫妻に

安部首相以下出席者一同が万歳三唱したのだ

アジア・太平洋戦争でヤマトの捨て石にされた沖縄を 今度はアメリカに売っ

た その日

沖縄県民にとっては 屈辱の日だというのに

なぜ 主権者となったわたしたちが

テンノウに平伏する儀式を営まねばならないのか

なぜ アジアのひとたちを逆なでする儀式を強行し

なぜ 退位の礼並びに即位の礼で

テンノウに感謝し

テンノウから「お言葉」を頂かねばならないのか

なお霧に包まれた 大嘗祭行事に付きあい

そのために 多額の税を投入しなければならぬのか

テンノウといえば よみがえる苦い記憶

奉安殿への最敬礼をうっかり怠って

教師に いやというほどぶんなぐられた友人

白木の箱を捧げ 眼を伏せた遺族が先頭に立つ

町中の暗い行列

満員電車であろうと 皇居前にさしかかると

帽子を脱いで乗客全員 体をよじって最敬礼していた 滑稽な日々

「畏くも」と教師がいえば

(あ 次はテンノウヘイカという言葉が来る)と察知し

さっと 姿勢を正さねばならなかった子どもの日

テンノウヘイカバンザイ!

など二度と云いたくない

そんな光景を二度と見たくない

バンザイ!を唱えることで

わたしたちの主権は侵され

バンザイ！を唱えることで 権力を得

利を得るものたちが

跋扈する

世が

再来しているではありませんか

## 一枚の地図

ここに一枚の地図があります

市販の地図で探しても

地図の中の村は 見つからない

一九四二年 跡形なく消えてしまった 村

マレーシア・ピラン州ジュルプ県イロンロン村

その地図を描いたのは

村が廃墟となったとき

十四歳の少女だった 蕭月嬌

幻となった村の風景を

憤怒と悲哀の中で 描きました

イロンロン村をゆったりと蛇行して

川は流れています

右手は 鬱蒼とした山地

村の中央 川と道路の間には

大きな錫の精錬工場

蕭月嬌の家の裏手には 学校

道路に面して いくつかの店

小さな古い飛行場に

旗が2本 なびいています

村に入る道 また広い道路に沿って  
あるいは川に沿って 家々が立ち並び  
その一軒一軒に

住んでいた人の名が 丁寧に記されています

蕭来源

駱発

鐘月雲

張生

という具合に

まわりを山に囲まれ

空気はあくまで清らかに 作物は実り豊かに

戦いの日にも 桃源郷のように

穏やかだった 村

つつましく 堅実に

助け合った働いていた村人たち

蕭月嬌は母と姉 弟との 四人家族

畑でせっせと働きながら

日々 ただ楽しかったのです

一九四二年三月一八日

日本軍が不意に現れる その日まで

その日

一四歳の蕭月嬌は

母を 弟を 家を 失いました

ちょうど昼休み 一九歳の姉と食堂にいて

自転車に乗って村に入ってくる 日本軍人に気付き

慌てて姉と裏門から抜け出し

這ってパイナップル畑に隠れたため

二人だけ助かったのです

まさか村中殺されるとは思わず

「日本人はクーニャンを見ると犯す」

という噂に逃れたのでした

夜になって さらに隣村まで逃れ

バナナ園の溝に隠れて

はるか燃え上がるイロンロン村を見えていました

姉と抱き合い そんな遠くまで聞こえてくる

村人たちの絶叫を 震えながら 聞いていました

翌朝帰っていった村は

いっばいの死体

母も 弟も 生きてはいなかった

幼い弟は さんざん斬られてすぐ死ねず

道に這い出したのでしよう

もがき苦しんだ姿で 息絶えていました

「おう どうしてこんな目にあわねばならないのか！」

一九八六年夏 日本にやってきて

むせび泣きながら 証言された

蕭月嬌さん

四四年の月日が経っていました

姉が日本軍に連行されるのを恐れ

すぐに婚約者と結婚し

孤児となって過ごした解放までの

三年八ヶ月

飢え タニシをとって食べ 空腹をごまかし

栄養失調で 目は黒ずみ

死に近い日々だった

「おう どうしてこんな目にあわねばならないのか！

この世から 戦争を消滅させたい

それが願いです」

ハンカチで目を押さえ 言われました

イロンロン村

今は



一面に 生い茂る草々  
風にしなう 荒れ果てた土地

そこに

かつて美しい村があり

人々が行き交い

つつましく働き

夢を語っていたことを

一枚の地図だけが 示しています

## 大津島

三月さくら咲く大津島

丘の上に置かれた鋼鉄の魚のなかに入りました

全長十四・一五メートル

胴直径わずかに一メートル

真ん中に開いた円形の入口の蓋を

同行の水上さんに閉めてもらうと

まっくら

真の闇

どうあがこうともう自分からは抜け出せない

両脚を前に出して坐ります

発射される

きこえてくるのは

荒いさびしい波の音

闇のなかにありありと見えてくるのは

あと何秒後のいのちの終わり

魚の突端の一・五トンの芍薬もろとも

粉々に千切れ飛ぶいのち

「海は静か　これが決戦の最中だろうかと心を疑わせます」  
と友への手紙に書いた「歳の小森一之

「母よ、ああお母ちゃん 光雄は護国の鬼となり

母さんに面会に家に帰りますと、特眼鏡に映じた水平線に祈りたり」

はたち、沖繩の海に散らばった松田光雄

「八月一日、一七三〇、敵発見、輸送船団なる、我落付きて体当たりを敢行せん。天皇陛下万歳を叫んで突入あるのみ、さらば神州の曙よ、きたれ」

八月十一日朝 下ろされた人間魚雷に

乗りこんでいった 佐野元

彼は十八歳

その死の四日後に日本は無条件降伏します

それから三十八年経って 天皇は天皇のまま

元気です

三月さくら咲く大津島

人間魚雷「回天」のどてっ腹の闇のなかで

ふるえながら

海の音を聞いています

## かすかな悲鳴

かすかに悲鳴がきこえます

はるかビルマの河に 沈んでいった

あなたの悲鳴が

私たち その河を尋ね

あなたへの花束 そっと岸边に捧げることもなく

あなたの名

あなたの命日も知らず

日本は天皇中心の神の国

口走った首相はそのために処罰されることもなく

日本が攻めていったことでアジアの国は解放され  
感謝されているのだと

「慰安婦」は商行為 当時は合法だった

女たちは望んでいったのだと

声高に叫ぶ声は

国会にも 書物にも テレビにも はびこり始め

そんな列島に かすかにきこえてくる

あなたの 悲鳴

왜 이렇개 고생은 해야

(なぜ このような目に)

아이고 내 팔자야

(おう なぜ このような目に)

遠く ビルマの河底から

風もないのに あれから七十年以上経つのに